

## 人間の自然に即した

はぐくみを

清水美智子

早春は、新緑の頃や緑濃き夏や紅葉の映える頃とは違った静かな落着きの中に、来るべき季節への生命の胎動が感じられて、私は好んで戸外に出る。庭先の植物たちともゆっくりに挨拶を交わす。寒風の中で芽を出し花咲くクロッカスには、土の中にあつてめぐり来るこの時を忘れずによく育ってきたねと声をかけたくなる。葉に先がけて花をつける落葉樹たちを見守っていると、一日一日花芽をふくらませていく。何ヶ月も前から花芽をつけ木枯しにも霜にも耐えて静かに成熟の時をすごして開花期を迎える、そういう生命の営みが伝わってきて、いとおしくまたなつかしく感じられるのである。様

々の条件に微妙に左右されながらも確実に訪れてくる早春の息吹きは、近代科学技術の進歩とかかわりなくはるか昔より続いてきた自然界のしくみであり、それに対するなつかしきの感情は、同じ自然界の一員として生かされている者ゆえの思いなのかもしれない。

幼い子どもたちの世界にひととき身をおくと、私は同じようないとおしさとなつかしさを覚える。それは子どもの内なる自然を感じるとどうか、人間の内なる自然が蘇ってくるという感情のようでもある。子どもたち若い生命が生まれ成長していくのは、まさしく生命あるものの自然の営みである。ゆったりした時の流れに身をゆだねて、それぞれ必要なものを吸収し、それぞれに必要な成熟の時間をかけて生きていくところに、ものの生産とはちがった生命が育っていくことの特質があるのだろう。教育とくに幼年期の教育は、本来この特質に即して人間の自然の営みとして行われる活動であった。

子どもたちを学校という公的機関に集めて教育する形態は、つまるところおとなが子どもを思う通りに形づくっていく方向に動いてきた。制度が整ってくればくるほど、また学

校に多くを期待すればするほど、子どもたちは評価を気にしながら多くを教えこまれ、次々と日課をこなすことに追われる存在になる。自らが求めて行動し学び、自分自身の時間を生きて成長していく主体としての喜びが稀薄になる。教師の要求に合わせて自分を形づくることに急で、内なる世界が育つ暇がなく、あるいは自分の心の求めるところを抑圧していく。そうした心のあつれきが思春期という成長の節目に至って、様々な病理現象となつて顕現化している。現実は痛ましい。自然な生命の営みに即した教育とは縁遠い姿である。

去る日、コンピューター工学の第一人者のお話を聞く機会があつた。急激な技術革新によるマイコン時代の到来として輝かしい未来展望が語られ、人間は多くの単純労働から解放されてもっと人間らしく生きることができると、人間でなければできない価値あることに打ちこむことが望ましいと語られるのを聞いた。私は近代科学技術の進歩が導く未来社会をバシラに描き信じる者ではないが、その疑問は今さておき、少くとも我々は時代の趨勢の中で生きねばならない運命にある以上、ここで真に人間らしいとはどういうことか、人間らしく生きるとはどこに価値をおいて生きることがか、自分はどうか

いう生き方を選ぶかを各自が考えていく必要がある。それはいつの時代どんな社会にあつても変わらない価値を求めるところにもなるかもしれない。科学技術が飛躍的に進歩しても、人間の心の問題は千年前も今も変わらないところがあるからである。

幼い子を教育する仕事は最も人間の自然に即した営みであり、人間らしさを大切にはぐくんできていく息の長い根の深い仕事である。おとなが教育の成果を追い求めたりそれを誇る気持を捨てて、じっくり子どもとつき合いながら自分の心に響くものを見出していくことは、おとなにとつても価値あることである。保育者は小学校教育への適応などということあまり意識しない方がいい。適応とは外側だけの問題ではないのに、ともすると目に見えるところだけをとりあげて即効を狙つた指導に走りがちになるからである。幼い時から型にはめ梓つけられてしまうことで、感受性や探求心や想像力とか自ら学ぶ力など人間らしさの根幹をなすはたらきが育たないことを私は最も恐れるものである。本当に大切なものはあらさまには見えないということを中心とめておきたい。

(大阪教育大学)